

葉

太宰 治



一冊堂青空文庫

葉

太宰治

撰^{えら}ばれてあることの

恍惚^{こうこつ}と不安と

二つわれにあり

ヴェルレエヌ

死のうと思っていた。ことしの正月、よそから着物を一反もらった。お年玉としてである。着物の布地は麻であった。鼠色の

こまかい縞目しまめが織りこめられていた。これは夏に着る着物であるう。夏まで生きていようと思った。

ノラもまた考えた。廊下へ出てうしろの扉をばたんとしめたときに考えた。帰ろうかしら。

私ができることをしないで帰ったら、妻は笑顔をもって迎えた。

その日その日を引きずられて暮しているだけであった。下宿屋

で、たった独りして酒を飲み、独りで酔い、そうしてこそそ蒲^{ふと}団^んを延べて寝る夜はことにつらかった。夢をさえ見なかった。疲れ切っていた。何をするにも物憂かった。「汲^くみ取り便所は如何^{いか}に改善すべきか？」という書物を買って来て本気に研究したこともあった。彼はその当時、従来の人糞^{じんぷん}の処置には可成^{かなり}まいっていた。

新宿の歩道の上で、こぶしほどの石塊^{いしころ}がのろのろ這^はって歩いているのを見たのだ。石が這って歩いているな。ただそう思っていた。しかし、その石塊^{いしころ}は彼のまえを歩いている薄汚い子供が、糸で結んで引摺^{ひきず}っているのだということが直ぐに判った。

子供に欺かれたのが淋しいのではない。そんな天変地異をも平気で受け入れ得た彼自身の自棄^{やけ}が淋しかったのだ。

そんなら自分は、一生涯こんな憂鬱^{ふさ}と戦い、そうして死んで行くということに成るんだな、と思えばおのが身がいじらしくもあつた。青い稲田が一時にぽつと霞^{かす}んだ。泣いたのだ。彼は狼狽^{うろた}えだした。こんな安価な殉情的な事柄に涕^{なみだ}を流したのが少し恥かかったのだ。

電車から降りるとき兄は笑うた。

「莫迦^{ばか}にしよげてるな。おい、元氣を出せよ」

そうして竜の小さな肩を扇子でポンと叩いた。夕闇のなかでその扇子が恐ろしいほど白っぽかった。竜は頬のあからむほど嬉しくなった。兄に肩をたたいて貰ったのが有難かったのだ。いつもせめて、これぐらいにでも打ち解けて呉れるといいが、と果敢なくも願うのだった。

訪ねる人は不在であった。

兄はこう言った。「小説を、くだらないとは思わぬ。おれには、ただ少しまだるっこいだけである。たった一行の真実を言いたいばかりに百頁の雰囲気をしらえている」私は言い憎そう

に、考え考えしながら答えた。「ほんとうに、言葉は短いほどよい。それだけで、信じさせることができるならば」

また兄は、自殺をいい気なものとして嫌った。けれども私は、自殺を処世術みたいな打算的なものとして考えていた矢先であったから、兄のこの言葉を意外に感じた。

白状し給え。え？ 誰の真似なの？

水^{みづ}到^{いた}りて渠^{きよ}成^なる。

彼は十九歳の冬、「哀蚊^{あわれが}」という短篇を書いた。それは、よい作品であつた。同時に、それは彼の生涯の渾沌^{こんとん}を解くだいじな鍵^{かぎ}となつた。形式には、「雛^{ひな}」の影響が認められた。けれども心は、彼のものであつた。原文のまま。

おかしな幽霊を見たことがございます。あれは、私が小学校にあがつて間もなくのことでございますから、どうせ幻燈のようにとろんと霞^あんでいるに違いございませぬ。いいえ、でも、その青蚊帳^{おがや}に写した幻燈のような、ぼやけた思い出が奇妙にも私には一年と愈々^{いよいよ}はつきりして参るような気がするのでございます。

なんでも姉様がお婿をとつて、あ、ちようどその晩のことでご

ざいます。御祝言の晩のこととございました。芸者衆がたくさん私の家に来て居りまして、ひとりのお綺麗きれいな半玉さんに紋附ほころの綻びを縫って貰ったりしましたのを覚えて居りますし、父様が離座はな敷れの真暗な廊下で脊のお高い芸者衆とお相撲すもうをお取りになっいらっしゃったのもあの晩のこととございました。父様はその翌年お歿なくなりになられ、今では私の家の客間の壁の大きな御写真のなかに、おはいりになっ居られるのでございますが、私はこの御写真を見るたびごとに、あの晩のお相撲のことを必ず思い出すのでございます。私の父様は、弱い人をいじめるようなことは決してなさらないお方でございましたから、あの相撲も、きつと

芸者衆が何かひどくいけないことをなしたので父様はそれをお懲こらしめになっていらっしやったのでございましょう。

それやこれやと思い合せて見ますと、確かにあれは御祝言の晩に違いございませぬ。ほんとうに申し訳がございませぬけれど、なにもかも、まるで、青蚊帳の幻燈のような、そのような有様でございますから、どうで御満足の行かれますようお話ができかねるのでございます。てもなく夢物語、いいえ、でも、あの晩に哀蚊の話を聞かせて下さつたときの婆様の御めめと、それから、幽霊、とだけは、あれだけは、どなたがなんと仰言おっしゃつたとて決して決して夢ではございませぬ。夢だなぞとおろかなこと、もうこ

れ、こんなにまざまざ眼先に浮んで参ったではございませんか。

あの婆様の御めめと、それから。

さようでございます。私の婆様ほど美しい婆様もそんなにあるものではございませぬ。昨年の夏お歿くなりになられましたけれど、その御死顔と言ったら、すごいほど美しいとはあれでございましょう。白蛾はくろうの御両頬には、あの夏木立の影も映らむばかりでございました。そんなにお美しくいらっしゃるのに、縁遠くて、一生鉄漿かねをお附けせずにお暮しなされたのでございます。

「わしという万年白歯を餌にして、この百万の身代ができたのじゃぞえ」

富本でこなれた渋い声で御生前よくこう言い言いして居られましたから、いずれこれには面白い因縁でもあるのでございましたよ。どんな因縁なのだろうなどと野暮なお探りはお止よしなさいませ。婆様がお泣きなさるでございましょう。と申しますのは、私の婆様は、それはそれは粹いきなお方で、ついに一度も縮緬ちりめんの縫紋の御羽織をお離しになったことがございませんでした。お師匠をお部屋へお呼びなされて富本のお稽古けいこをお始めになられたのも、よほど昔からのこととございましたでしょう。私なぞも物心地が附いてからは、日がな一日、婆様の老松おいまつやら浅間あさまやらの咽むせび泣くような哀調のなかにうっとりしているときがままございました程

で、世間様から隠居芸者とはやされ、婆様御自身もそれをお耳にしては美しくお笑いになって居られたようでした。いかなることか、私は幼いときからこの婆様が大好きで、乳母から離れるとすぐ婆様の御懷に飛び込んでしまったのでございます。

もつとも私の母様は御病身でございました故、子供には余り構うて呉れなかつたのでございます。父様も母様も婆様のほんとうの御子ではございませぬから、婆様はあまり母様のほうへお遊びに参りませず四六時中、離座敷のお部屋にばかりいらつしゃいますので、私も婆様のお傍そばにくつついて三日も四日も母様のお顔を見ないことは珍らしゅうございませんでした。それゆえ婆様も、私

の姉様なぞよりずっと私のほうを可愛がって下さいまして、毎晩のように草双紙くさそうしを読んで聞かせて下さったのでございます。なかにも、あれあの八百屋お七の物語を聞いたときの感激は私は今でもしみじみ味うことができるのでございます。そしてまた、婆様がおたわむれに私を「吉三きちぞ」「吉三」とお呼びになって下さった折のその嬉しさ。らんぷの黄色い燈火ともしびの下でしょんぼり草双紙をお読みになっていらっしゃる婆様のお美しい御姿、左様、私はこことごくよく覚えているのでございます。

とりわけあの晩の哀蚊の御寝物語は、不思議と私には忘れることができないのでございます。そう言えばあれは確かに秋でござ

いました。

「秋まで生き残されている蚊を哀蚊と言うのじゃ。蚊燻^{かいぶ}しは焚^たかぬもの。不憫^{ふびん}の故にな」

ああ、一言一句そのまんま私は記憶して居ります。婆様は寝ながら滅^{めい}入^いるような口調でそう語られ、そうそう、婆様は私を抱いてお寝になられるときには、きまって私の両足を婆様のお脚のあいだに挟んで、温めて下さったものでございます。或る寒い晩なぞ、婆様は私の寝巻をみんなお剥^はぎとりになっておしまいになり、婆様御自身も輝くほどお綺麗な御素肌をおむきだし下さつて、私を抱いてお寝になりお温めなされてくれたこともございま

した。それほど婆様は私を大切にしていらっしゃったのでございます。

「なんの。哀蚊はわしじゃがな。はかない……」

仰言りながら私の顔をつくづくと見まもりましたけれど、あんなに美しい御めめもないものでございます。母屋おもやの御祝言の騒ぎも、もうひっそり静かになっていたようでございましたし、なんでも真夜中ちかくでございましたよう。秋風がさらさらと雨戸を撫なでて、軒の風鈴がその度毎に弱弱しく鳴って居りましたのも幽かすかに思いだすことができるのでございます。ええ、幽霊を見たのはその夜のことでございます。ふっと眼をさましまして、

おしっこ、と私は申しましたのでございます。婆様の御返事がございませんでしたので、寝ぼけながらあたりを見廻しましたけれど、婆様はいらっしゃらなかったのでございます。心細く感じながらも、ひとりでそっと床から脱け出しまして、てらてら黒光りのする櫓^{けやき}普請の長い廊下をこわごわお厠^{かわや}のほうへ、足の裏だけは、いやに冷や冷やして居りましたけれど、なにさま眠くって、まるで深い霧のなかをゆらりゆらり泳いでいるような気持ち、そのときです。幽霊を見たのでございます。長い長い廊下の片隅に、白くしょんぼり蹲^{うす}くまって、かなり遠くから見たのでございますから、ふいるむのように小さく、けれども確かに、確かに、

姉様と今晚の御婿様とがお寝になって居られるお部屋を覗のぞいてい
るのでございます。幽霊、いいえ、夢ではございませぬ。

芸術の美は所詮しよせん、市民への奉仕の美である。

花きちがいの大工がいる。邪魔だ。

それから、まち子は眼を伏せてこんなことを囁ささやいた。

「あの花の名を知っている？ 指をふれればちゃんとわれて、き
たない汁をはじきだし、みるみる指を腐らせる、あの花の名が

判ったらねえ」

僕はせせら笑い、ズボンのポケットへ両手をつっ込んでから答えた。

「こんな樹の名を知っている？　その葉は散るまで青いのだ。葉の裏だけがじりじり枯れて虫に食われているのだが、それをこっそりかくして置いて、散るまで青いふりをする。あの樹の名さえ判ったらねえ」

「死ぬ？　死ぬのか君は？」

ほんとうに死ぬかも知れないと小早川は思った。去年の秋だっ

たかしら、なんでも青井の家に小作争議が起ったりしていろいろのごたごたが青井の一身上に振りかかったらしいけれど、そのときも彼は薬品の自殺を企て三日も昏睡こんすいし続けたことさえあったのだ。またついせんだつても、僕がこんなに放蕩ほうとうをやめないのもつまりは僕の身体がまだ放蕩に堪え得るからであらう。去勢されたような男にでもなれば僕は始めて一切の感覺的快樂をさけて、闘争への財政的扶助に専心できるのだ、と考えて、三日ばかり続けてP市の病院に通い、その伝染病舎の傍の泥溝どろの水を掬すくって飲んだものだそうだ。けれどもちよつと下痢をしただけで失敗さ、とそのことを後で青井が頬あからめて話すのを聞き、小早川は、そ

のインテリ臭い遊戯をこのうえなく不愉快に感じたが、しかし、それほどまでに思いつめた青井の心が、少からず彼の胸を打ったのも事実であつた。

「死ねば一番いいのだ。いや、僕だけじゃない。少くとも社会の進歩にマイナスの働きをなしている奴等は全部、死ねばいいのだ。それとも君、マイナスの者でもなんでも人はすべて死んではならぬという科学的な何か理由があるのかね」

「ば、ばかな」

小早川には青井の言うことが急にばからしくなつて来た。

「笑ってはいけない。だって君、そうじゃないか。祖先を祭るた

めに生きていなければならぬとか、人類の文化を完成させなければならぬとか、そんなたいへんな倫理的な義務としてしか僕たちは今まで教えられていないのだ。なんの科学的な説明も与えられていないのだ。そんなら僕たちマイナスの人間は皆、死んだほうがいいのだ。死ぬとゼロだよ」

「馬鹿！ 何を言っているやがる。どだい、君、虫が好すぎるぞ。それは成る程、君も僕もぜんぜん生産にあずかっていない人間だ。それだからとて、決してマイナスの生活はしていないと思うのだ。君はいつたい、無産階級の解放を望んでいるのか。無産階級の大勝利を信じているのか。程度の差はあるけれども、僕たち

はブルジョアジイに寄生している。それは確かだ。だがそれはブルジョアジイを支持しているのとはぜんぜん意味が違うのだ。一のプロレタリアアトへの貢献と、九のブルジョアジイへの貢献と君は言ったが、何を指してブルジョアジイへの貢献と言うのだろう。わざわざ資本家の懐を肥してやる点では、僕たちだってプロレタリアアトだって同じことなんだ。資本主義的経済社会に住んでいることが裏切りなら、闘士にはどんな仙人が成るのだ。そんな言葉こそウルトラというものだ。^{キンデルクランクハイト}小児病というものだ。一のプロレタリアアトへの貢献、それで沢山。その一が尊いのだ。その一だけの為に僕たちは頑張って生きていなければならぬのだ。

そうしてそれが立派にプラスの生活だ。死ぬなんて馬鹿だ。死ぬなんて馬鹿だ」

生れてはじめて算術の教科書を手にした。小型の、まっくろい表紙。ああ、なかの数字の羅列られつがどんなに美しく眼にしみたことか。少年は、しばらくそれをいじくっていたが、やがて、巻末のペエジにすべての解答が記されているのを発見した。少年は眉をひそめて呟ひそやいたのである。「無礼だなあ」

外はみぞれ、何を笑うやレニン像。

叔母の言う。

「お前はきりようがわるいから、愛嬌^{あいきょう}だけでもよくなさい。お前はからだが弱いから、心だけでもよくなさい。お前は嘘^{うそ}がうまいから、行いだけでもよくなさい」

知っていながらその告白を強いる。なんといういんけんな刑罰であろう。

満月の宵。光っては崩れ、うねっては崩れ、逆巻き、のた打つ浪のなかで互いに離れまいとつないだ手を苦しまぎれに俺が故意^{わざ}

と振り切ったとき女は忽ち浪に吞たちままれて、たかく名を呼んだ。俺の名ではなかった。

われは山賊。うぬが誇をかすめとらむ。

「よもやそんなことはあるまい、あるまいけれど、な、わしの銅像をたてるとき、右の足を半歩だけ前へだし、ゆったりとそりみにして、左の手はチョッキの中へ、右の手は書き損じの原稿をにぎりつぶし、そうして首をつけぬこと。いやいや、なんの意味もない。雀の糞を鼻のあたみに浴びるなど、わしはいやなのだ。そ

うして台石には、こう刻んでおくれ。ここに男がいる。生れて、死んだ。一生を、書き損じの原稿を破ることに使った」

メフィストフェレスは雪のように降りしきる薔薇ばらの花弁に胸を頬を掌を焼きこがされて往生したと書かれてある。

留置場で五六日を過して、或る日の真昼、俺はその留置場の窓から脊のびして外を覗くと、中庭は小春の日ざしを一杯に受けて、窓ちかくの三本の梨の木はいずれもほつほつと花をひらき、そのしたで巡査が二三十人して教練をやらされていた。わかい巡

査部長の号令に従って、皆はいっせいに腰から捕縄を出したり、呼笛を吹きならしたりするのであった。俺はその風景を眺め、巡査ひとりひとりの家について考えた。

私たちは山の温泉場であてのない祝言をした。母はしじゅうくつくつと笑っていた。宿の女中の髪のかたちが奇妙であるから笑うのだと母は弁明した。嬉しかったのであろう。無学の母は、私たちを炉ばたに呼びよせ、教訓した。お前は十六魂^{たまし}だから、と言いかけて、自信を失ったのであろう、もつと無学の花嫁の顔を覗き、のう、そうでせんか、と同意を求めた。母の言葉は、あたっ

ていたのに。

妻の教育に、まる三年を費やした。教育、成ったころより、彼は死のうと思いはじめた。

病む妻や とどこおる雲 鬼すすき。

赤え赤え煙こあ、もくらもくらと蛇体^{じやたい}みたいに天さのぼつての、ふくれた、ゆららと流れた、のっそらと大浪うった、ぐるぐるつと渦まえた、間もなくし、火の手あ、ののののと荒けなく

なり、地ひびきたてた山ばのぼり始めたずおん。山あ、てっぺらまで、まんどろに明るくなったずおん。どうどうと燃えあがる千本万本の冬木立は縫い、人を乗せたまっくろい馬こあ、風みたいに馳^はせていたずおん。（ふるさとの言葉で）

たった一言知らせて呉れ！ “Nevermore”

空の蒼^{あお}く晴れた日ならば、ねこはどこからかやって来て、庭の山茶花^{さざんか}のしたで居眠りしている。洋画をかいている友人は、ペルシャでないか、と私に聞いた。私は、すてねこだろう、と答えて

置いた。ねこは誰にもなつかなかった。ある日、私が朝食の鰯^{いわし}を焼いていたら、庭のねこがものうげに泣いた。私も縁側へでて、にゃあ、と言った。ねこは起きあがり、静かに私のほうへ歩いて来た。私は鰯を一尾なげてやった。ねこは逃げ腰をつかいながらもたべたのだ。私の胸は浪うった。わが恋は容^いれられたり。ねこの白い毛を撫でた^かく思い、庭へおりた。脊中の毛にふれるや、ねこは、私の小指の腹を骨までかりりと噛^かみ裂いた。

役者になりたい。

むかしの日本橋は、長さが二十七間四尺五寸あったのであるが、いまは廿七間しかない。それだけ川幅がせまくなったものと思わねばいけない。このように昔は、川と言わず人間と言わず、いまよりはるかに大きかったのである。

この橋は、おおむかしの慶長七年に始めて架けられて、そのうち十たびばかり作り変えられ、今のは明治四十四年に落成したものである。大正十二年の震災のときは、橋のらんかに飾られてある青銅の竜の翼が、ほのお焰に包まれてまっかに焼けた。

私の幼時に愛した木版の東海道五十三次道中双六では、すくろくここが振りだしになっていて、幾人ものやつこのそれぞれ長い槍を持つ

てこの橋のうえを歩いている画が、のどかにかかれてあつた。もとはこんなぐあいには繁華であつたのであろうが、いまは、たいへんさびれてしまった。魚河岸うおがしが築地つきじへうつつてからは、いつそ有名前もすたれて、げんざいは、たいていの東京名所絵葉書から取除かれている。

ことし、十二月下旬の或る霧のふかい夜に、この橋のたもとで異人の女の子がたくさんこじきの乞食の群からひとり離れて佇たたずんでいた。花を売っていたのは此の女の子である。

三日ほどまえから、黄昏たそがれどきになると一束の花を持ってここへ電車でやって来て、東京市の丸い紋章にじゃれついている青銅の

唐獅子からじしの下で、三四時間ぐらい黙って立っているのである。

日本のひとは、おちぶれた異人を見ると、きつと白系の露西亞ロシヤ人にきめてしまう憎い習性を持っている。いま、この濃霧のなかで手袋のやぶれを気にしながら花束を持って立っている小さい子供を見ても、おおかたの日本のひとは、ああロシアがいる、と楽な気持で呟くにちがいない。しかも、チエホフを読んだことのある青年ならば、父は退職の陸軍二等大尉、母は傲慢ごうまんな貴族、とうつとりと独断しながら、すこし歩をゆるめるであろう。また、ドストエーフスキイを覗きはじめた学生ならば、おや、ネルリ！と声を出して叫んで、あわてて外套がいとうの襟えりを搔かきたてるかも知れな

い。けれども、それだけのことであつて、そのうえ女の子に就いてのふかい探索をして見ようとは思わない。

しかし、誰かひとりが考える。なぜ、日本橋をえらぶのか。こんな、人通りのすくないほの暗い橋のうえで、花を売ろうなどというのは、よくないことなのに、——なぜ？

その不審には、簡単ではあるが頗るおもひロマンチックな解答を与え得るのである。それは、彼女の親たちの日本橋に対する幻影に由来している。二ホンでいちばんにぎやかな良い橋は二ホンバシにちがいない、という彼等のおだやかな判断に他ならぬ。

女の子の日本橋でのあきないは非常に少なかった。第一日目に

は、赤い花が一本売れた。お客は踊子である。踊子は、ゆるく開きかけている赤い蕾つぼみを選んだ。

「咲くだろうね」

と、乱暴な聞きかたをした。

女の子は、はっきり答えた。

「咲キマス」

二日目には、酔いどれの若い紳士が、一本買った。このお客は酔っ払いながら、うれしい顔をしていた。

「どれでもいい」

女の子は、きのうの売れのこりのその花束から、白い蕾をえら

んでやったのである。紳士は盗むように、こっそり受け取った。

あきないはそれだけであつた。三日目は、即ちきようである。つめたい霧のなかに永いこと立ちつづけていたが、誰もふりむいて呉れなかつた。

橋のむこう側にいる男の乞食が、松葉杖つきながら、電車みちをこえてこつちへ来た。女の子に縄張りのことと言いがかりをつけたのだった。女の子は三度もお辞儀をした。松葉杖の乞食は、まっくろい口鬚くちひげを噛みしめながら思案したのである。

「きよう切りだぞ」

とひくく言つて、また霧のなかへ吸いこまれていった。

女の子は、間もなく帰り仕度をはじめた。花束をゆすぶって見た。花屋から屑花くずはなを払いさげてもらって、こうして売りに出てから、もう三日も経っているのであるから花はいい加減にしておれていた。重そうにうなだれた花が、ゆすぶられる度毎に、みんなあたまを顫ふるわせた。

それをそっと小わきにかかえ、ちかくの支那蕎麦しなそばの屋台へ、寒そうに肩をすぼめながらはいって行つた。

三晩つづけてここで雲吞ワンタンを食べるのである。そこのあるじは、支那のひとであって、女の子を一人並の客として取扱つた。彼女にはそれが嬉しかったのである。

あるじは、雲吞^{ワンタン}の皮を巻きながら尋ねた。

「売レマシタカ」

眼をまるくして答えた。

「イイエ。……カエリマス」

この言葉が、あるじの胸を打った。帰国するのだ。きっとそう
だ、と美しく禿^はげた頭を二三度かるく振った。自分のふるさとを
思いつつ釜から雲吞の実を掬っていた。

「コレ、チガイマス」

あるじから受け取った雲吞の黄色い鉢を覗いて、女の子が当惑
そうに呟いた。

「カマイマセン。チャシユウワントン。ワタシノゴチソウデス」
あるじは固くなつて言った。

雲吞は十銭であるが、チャシユウワントン又焼雲吞は二十銭なのである。

女の子は暫くもじもじしていたが、やがて、雲吞の小鉢を下へ置き、肘ひじのなかの花束からおおきい蕾のついた草花を一本引き抜いて、差しだした。くれてやるというのである。

彼女がその屋台を出て、電車の停留場へ行く途中、しなびかかった悪い花を三人のひとに手渡したことをちくちく後悔した。突然、道ばたにしゃがみ込んだ。胸に十字を切つて、わけの判らぬ言葉でもつて

烈^{はげ}しいお祈りをはじめたのである。

おしまい日本語を二言囁いた。

「咲クヨウニ。咲クヨウニ」

安楽なくらしをしているときは、絶望の詩を作り、ひしがれたくらしをしているときは、生のよろこびを書きつづる。

春ちかきや？

どうせ死ぬのだ。ねむるようなよいロマンスを一篇だけ書いて

みたい。男がそう祈願しはじめたのは、彼の生涯のうちでおそらくは一番うつとうしい時期に於いてであつた。男は、あれこれと思いをめぐらし、ついにギリシャの女詩人、サフォに黄金の矢を放つた。あわれ、そのかぐわしき才色を今に語り継がれているサフォこそ、この男のもやもやした胸をときめかす唯一の女性であつたのである。

男は、サフォに就いての一二冊の書物をひらき、つぎのようなことがらを知らされた。

けれどもサフォは美人でなかった。色が黒く歯が出ていた。ファオンと呼ぶ美しい青年に死ぬほど惚れた^ほ。ファオンには詩が

判らなかつた。恋の身投をするならば、よし死にきれずとも、そのこがれた胸のおもいが消えうせるといふ迷信を信じ、リュウカディアの岬から怒濤どとうめがけて身をおどらせた。

生活。

よい仕事をしたあとで

一杯のお茶をすする

お茶のあぶくに

きれいな私の顔が

いくつもいくつも

うつっているのさ

どうにか、なる。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
